架蔵箏組歌本『ことのくみ（仮称）』解題と翻刻

飯島　一彦

一　はじめに

昨夏（平成二十九年六月）、箏組歌の豆本を手に入れた。刊記に「天和二年」（１６８２）とある。少々驚いた。この手の箏組歌の豆本では、元禄八年（１６９５）刊の『峯の松風』があるのみで、同年刊の『琴曲抄』（小本）が多数流布し、奏法注記なども有しており、版を重ねて著名であることもあり、その影に隠れて目立たなかったと言って良い。しかし天和二年とは、箏組歌を作曲・完成させ流布させた、言わば箏曲の元祖と言って良い八橋検校（慶長一九（１６１４）～貞享二（１６８５）年）の在世中である。もし天和二年刊の箏組歌本が実際に存在するとすれば、それは箏曲史にとって大きな出来事である。

すでに拙稿「架蔵箏組歌本『琴のくみ』の位置づけ　―附翻刻・影印―」（『マテシス・ウニウェルサリス』第九巻第二号（２００８年3月））で指摘しておいたとおり、箏曲史については現在でも平野健次による、

「歌謡文学としての箏曲―筑紫箏と俗箏組歌の資料と問題―」（『国語と国文学』第三十五巻第四号所収、後に東洋音楽選書三『箏曲と地歌』〈音楽之友社、昭和四二（１９６７）年〉に再録）

「地歌・箏曲文献目録」（東洋音楽選書三『箏曲と地歌』〈音楽之友社、昭和四二年〉所収）

『三味線と箏の組歌　箏曲・地歌研究Ⅰ』（白水社、昭和六二（１９８７）年）

という著作から研究を始めなければならない。詳細は前稿に譲るが、そこで指摘しておいたように、平野の所論は箏組歌は筑紫箏に淵源を発するとはいえそればかりから発展したものではなく、様々な歌謡（特に寺院歌謡）の影響を受けながらも徐々に形作られ、いわゆる八橋十三組はすべてが八橋検校（慶長一九（１６１４）～貞享二（１６８５）年）の作品とは断定できないものの、彼の在世中にほぼまとめられたと考えられている。ただし、現在十三組の内に入れられているものでも、諸流派あるいは八橋の弟子たちによって付け加えられたものもあり、注意しなければならない

とまとめることができる。つまり、もし天和二年刊の箏組歌十三組が『琴曲抄』等とほぼ同じ内容で存在したとするならば、それらがすべて八橋検校の作品ではなくとも、八橋検校在世中に、すでに十三組が完成し、出版されていたと断定でき、箏組歌の歴史が少し明確になるからである。

平野は右掲の著作の中ですでに天和二年の刊記を残して再版（あるいは覆刻）されたとおぼしき文政二年（１８１９）河南喜兵衛版（上野学園日本音楽史研究所蔵）および文政四年（１８２１）香具屋徳兵衛版（平野健次旧蔵）を紹介しており、天和二年版の存在を示唆している。

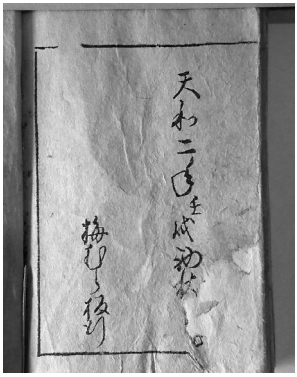
さらに、実際に天和二年「小刀屋六兵衛」の刊記を持つ袖珍本（豆本）が存在する。平野によれば「題名不詳豆本」とされるこの本は、谷垣内和子による『日本古典音楽文献解題』（「ことのくみ」の項）の記述では「八橋検校作曲の組歌一三曲の詞章を収録。特に「ふきくみ」第四歌までには歌詞の右側に演奏法の注記が施されており、この種の記譜を有するものとしては最古の組歌本である。」と評価される。しかし、平野はこれを以て八橋検校在世中に箏組歌十三曲が完成したと断定するには至っていなかった。天和二年に出版されたとするにはいささか疑念がもたれたからであろう。「小刀屋六兵衛」という版元名にしても異例で、他に見ることができない。果たして実際に天和二年版『ことのくみ』は存在したのであろうか。

二　架蔵箏組歌本『ことのくみ（仮称）』について

架蔵本『ことのくみ（仮称）』は、縦約86㎜、横約63㎜、墨付き四四丁の袖珍本（豆本）である。相当使い込まれた形跡があり、手擦れが激しく、題簽があるが題名は読み取れない。本稿では『日本古典音楽文献解題』の記述や本文の内容から『ことのくみ（仮称）』と称したが、『〇〇うた』と読めなくもない。（写真①参照）相当傷んだ物と見えて、全丁に渉って裏打ちが施されている。表紙などは当時のままと見えるが、もちろん綴じ糸は新補である。刊記は「天和二年壬戌初秋日／梅むら板行」とあり（写真②参照）、『琴曲抄』や『峯の松風』の出版元である梅村弥右衛門版であることが推測される。

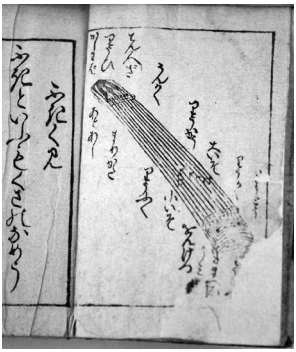
早速日本音楽史研究所蔵本三点（元禄八年刊本（写真⑫参照）、文政二年河南喜兵衛刊本（写真⑭参照）、天和二年小刀屋六兵衛刊本（写真⑪参照）との比較を試み、その結果、手擦れなどでかなり傷んではいるが架蔵本が一番古く、かつ彫りも深く鋭く、天和二年版そのものかそれに近い後刷り本であることが判明した。

それを示す一例を掲げる。内扉ウに掲載される箏図（写真③④参照）であるが、小刀屋六兵衛版（写真⑤参照）はそもそもこの図を持たない。元禄八年刊本（写真⑥参照）、文政二年河南喜兵衛刊本（写真⑦参照）、さらに『峯の松風』（写真⑧参照）には、一見まったく同じ箏の全体図（部分々々の名称入り）が掲載されるが、よく観察すると架蔵本とは微細な点で多数の違いを見いだすことができる。典型的な例が図中央にある「小いそ」の注記である。それぞれの版で彫りが明らかに違うのが見てとれる。この様な違いがほぼ各丁で指摘できるのである。詳細は別項（『日本音楽史研究所年報』第九号「天和二年版『ことのくみ』について」）に譲るが、要するにこれらすべては別版で、日本音楽史研究所蔵本は三本とも覆刻されたものなのである。おそらく『峯の松風』も天和二年元版を利用したものなのであろう。



写真②　架蔵本刊記

写真①　架蔵本表紙

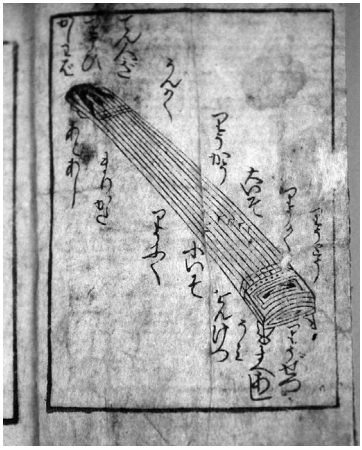


写真④　架蔵本内扉ウラ

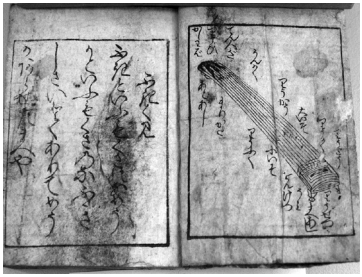
写真③　架蔵本内扉ウラと一丁オモテ

写真⑤　小刀屋六兵衛版表紙見返と一丁オモテ

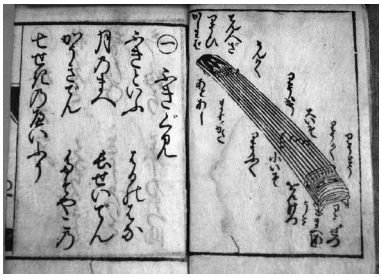
写真⑦　文政二年河南喜兵衛刊本内扉ウラ



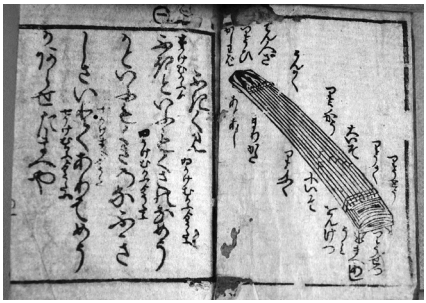
写真⑥　元禄八年刊本内扉ウラ



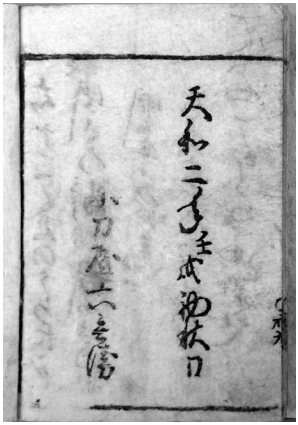
写真⑨　元禄八年刊本内扉ウラと一丁オモテ



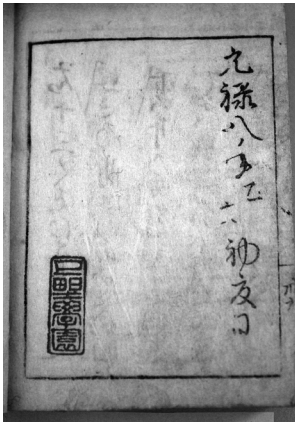
写真⑧　『峯の松風』内扉ウラと一丁オモテ



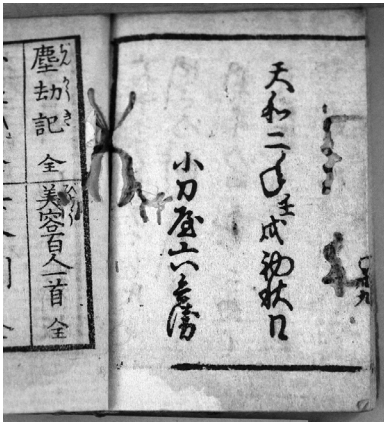
写真⑩　文政二年河南喜兵衛刊本表紙見返と一丁オモテ



写真⑪　小刀屋六兵衛版刊記



写真⑫　元禄八年版刊記



写真⑬　文政二年河南喜兵衛版の天和二年刊記

写真⑭　文政二年河南喜兵衛版刊記

結果として言えることは、天和二年版は確かに存在したということである。それも本来は『日本古典音楽文献解題』の説明のような形（写真⑤⑩参照）ではなく、記譜を一切持たない歌詞本（写真③⑨参照）としての板行だったのである。

三　翻刻『ことのくみ（仮称）』

以下に架蔵写本『ことのくみ（仮称）』の翻刻を示す。変体仮名は通行の平仮名に直した。濁点はほとんど付されていないが、まれにある。それが「た」と「く」の一部だけなのは、発声上の意味があるかとも思われるが、全体としては記譜がないものなので、もしかしたらあまり意味は無いのかも知れない。とりあえずそのままに翻刻した。ふり仮名もごくまれにあり、そのままに示した。漢字表記もそのままで示した。破損で読めない字は○○○として示した。覆刻本のごとき奏法注記（記譜）は一切入れられていない。全編にわたって、一曲が見開きの片側（一頁）に入るように考えられて筆耕されている。明らかに、片手で持って歌が歌えるように工夫した物と言えよう。もしかしたら、左手で本書を持ち、右手で箏を弾き（当然押し手などの奏法は用いられない）、歌を歌うという演奏（練習）形態に沿った物だったのかも知れない。

◎『ことのくみ（仮称）』翻刻

表紙題簽　（不詳、写真①参照）

表紙見返　余白

内扉オ　　余白
内扉ウ　　箏図（写真④参照）

「　　ふきくみ
ふきといふもくさのなめう
かといふもくさのなふき
しさいとくあ○○○○○
かあら○○○○○　　」（一オ、写真③参照）

「はるのはなのきんきよく
くはふうらくにりうくは
えんりうくはゑんのう
くひすはおなしきよく
をさへつる　　」（一ウ）

「月のまへのしらへはよ
さむをすくるあき風
くもゐのかりかねは
ことちにおつる

こゑ〳〵　」（二オ）

「ちやうせいてんのうち
にはしゆんしうを
とめりふらうもんの
まへには月のかけ
をそし　」（二ウ）

「（蕗、茗荷の図）　」（三オ）

「（古代宮廷図、屏風の蔭に箏）　」（三ウ）

「かうきてんのほそとの
にた、すむはたれ〳〵
おほろ月よのないし
のかみひかるけんし
の大しやう　」（四オ）

「たそや此夜中に
さいたるかとをたゝくは
たゝくともよもあけ
しよひのやくそく
なけれは　」（四ウ、柱丁付は「〇三」）

「七せきのへいふうもを
とらはなとかこへさらん
られうのたもともひ
かはなとかきれさらん　」（五オ）

「　梅かえくみ
梅かえたにこそうくひす
はすをくへ風ふかはいか
にせんはなにやとる
うくひす　」（五ウ）

「（梅が枝に宿る鶯図）　」（六オ）

「（鶴亀図）　」（六ウ、柱丁付は「〇四」）

「はなちるさとのつれ〳〵
たえ〴〵のことのね
はなたちはなの袖のかに
やまほと、きすおと
つる、　」（七オ）

「おもひねのゆめのま
まくらにちきるあけ
かたさめてはもとの
つらさにてなみたの
ほかはあらしな　」（七ウ、柱丁付は「〇五」）

「さよふけてなくちとり
なにをおもひあかし
ねうきよをすまのう
らみにてわれとひと
しきなみた川　」（八オ）

「しらまゆみのまゆみの
そるへきはそらいて
八十のおきなのこひに
こしをそらいた
」（八ウ、柱丁付は「〇六」）

「みほのまつ〇〇〇〇
たえておき〇〇〇〇
あらしな水〇〇〇〇〇
月ともに〇〇〇〇〇〇
くふしさん
」（九オ）

「　心つくしくみ
心つくしの秋風にすま
のうらはのなみまくら衣
かたしきひとりねてゆめ
もむすはぬよな〳〵
」（九ウ、柱丁付は「〇七」）

「ふるさとをはる〳〵とへ
たてゝこゝにすみた川
みやことりにことはん
きみはありやなし
やと
」（十オ）

「なつのよのあけほのに
ゆめをさますほとゝ
きすしろたへにみゆる
は月にさらすうの
はな
」（十ウ、柱丁付は「〇八」）

「きりにたゝすむをく
るまやつしてたてる
をくるまの人めしのふの
ちきりこそふけてね
やのかよひち
」（十一オ）

「あすか川のみなかみを
すゝりの水にせき入
てかくことのははつき
ましやけふもくらさん
いのちかや　」（十一ウ、柱丁付は「〇九」）

「ちきりしよひのたそ
かれしるへふかきそらたき
とめゐるかたのはきの
戸をひらくや袖のうつ
り香（か）　」（十二オ）

「　天下たいへいくみ
てんかたいへいちやうきう
におさまる御よのまつ風
ひなつるはちとせふるたにの
なかれに亀あそふ　」（十二ウ、柱丁付は「〇十」）

「人しれぬちきりはあ
さからぬ物おもひつゝ
むとすれとむらさき
のいろにいつるそ
はかなき
」（十三オ）

「はかなくもくまなき月
をいかてうらみしとに
かくにわか袖にたえぬ
なみたの夕くれ
」（十三ウ、柱丁付は「〇十一」）

「はなのえんの夕くれお
ほろ月よにひく袖さた
かならんちきりこそ
こゝろあさく見えけれ
」（十四オ）

「すみよしのみやところ
かきならすことのね神
のめくみにあひそめ
てすきしむかしをか
たらん

」（十四ウ、柱丁付は「〇十二」）

「あきの山のにしきはた
つたひめやをりけんしぐ
れふるたひことにいろの
ますそあやしけれ

」（十五オ）

「　うす雪くみ
うらめしやわかゑんうす
ゆきのちきりかきえにし
人のかたみとてなみた
はかりやのこるらん

」（十五ウ、柱丁付は「〇十三」）

「ひよくれんりのかたら
ひもかはれはかはる世の
ならひさりとてはうら
むましやむかしは
なさけ有しを
」（十六オ）

「わかむらさきを手に
つみてふかきこゝろ
のいろますなかきちき
りはむすひしもくさ
のゆかりとしるへし
」（十六ウ、柱丁付は「〇十四」）

「しのゝめのまかきにつ
ゆをふくむあさかほた
まのかつらたをやかにかゝ
るやはなのおもかけ
」（十七オ）

「よゝの人のなかめし
月はまことのかたみそ
とおもへは〳〵なみた
たまをつらぬく
」（十七ウ、柱丁付は「〇十五」）

「よしの川のはないかた
さほさすひまもあらし
ないはなみたかきやま
かせのよもにちらすは
なのか
」（十八オ）

「　雪のあしたくみ
ゆきのあしたのあらしは
木すゑのはなのちるふ
せいなこりおしきはとにかく
にまちえし君のかへるさ
」（十八ウ、柱丁付は「〇十六」）

「あさましやわか身はくも
井のかりのゆふきり
におとしめらるゝ
おもひをはいつのよに
かはわすれん
」（十九オ）

「まとろめはおもかけを
しけ〳〵とみしかよ
にほとゝきすおとつ
れてはつねにゆめそ
さめける
」（十九ウ、柱丁付は「〇十七」）

「なかむれはいとゝたに
こひしき人のこひしきに
くもらはくもれ秋の
よの月にうらみは
あらしな
」（二十オ）

「みねのあらしのかよふ
かたにの水のなかれかね
さめにきけはまつかせ
はことのねにたかはし
」（二十ウ、柱丁付は「〇十八」）

「あふひのうへのときめきか
もの物見のをりからくる
まあらそひつれなき
はふかきうらみなるへ
し
」（二十一オ）

「　雲のうへくみ
雲のうへのなかめはあり
しむかしにかはらねと
見したまたれのうちそ只
なつかしやゆかしや
」（二十一ウ、柱丁付は「〇十九」）

「おもしろやさみたれはな
たちはなのにほへりほ
と丶きすおとつれてみ
しかよなれとねら
れぬ
」（二十二オ）

「なか〳〵にはしめより
なれすは物をおもはし
わすれはくさのなにあ
れとしのふは人のおも
かけ
」（二十三オ、柱丁付は「〇二十」）

「（宮中出し衣の図）
」（二十四オ）

「（女三の宮、柏木垣間見の図）
」（二十四ウ）

「おもひあまりせきかねて
うらみぬるよのなみたはとこ
すさましやひとりたゝま

くらにこひそしらるゝ

」（二十五オ）

「むさしのにゆきくれて
月をなかめてくさまくら
こひしき人をゆめに見
てうたゝねにそてし
ほる

」（二十五ウ、柱丁付は「〇二十一」）

「のきをめくるてんてき
ことのねにたとへて
七ねんのよるのあめ
かつてしらぬゆめのよ

」（二十六オ）

「　うすころもくみ
かすならぬ身にはたゞ
思ひもなくてあれかし
人なみ〳〵のうす衣

袖のなみたそかなしき　」（二十六ウ、柱丁付は「〇二十二」）

「あこかれておもひねの
まくらにかはすおもかけ
それかとてかたらんと
おもへはゆめはさめに
けり　」（二十七オ）

「しらゆきのみゆきのつ
もるとしはふるとも
あくましやもろともに
ねみたれかみのかほはせ　」（二十七ウ、柱丁付は「〇二十三」）

「ひく人はそれ〳〵あまた
ありともつまことにもと
のこゝろかはらすはことち
におちよあきかせ　」（二十八オ）

「かしわきのゑもんのまり
をとんとけたれはまり
はえたにとゝまりたれは
梅ははらりほろりと

」（二十八ウ、柱丁付は「〇二十四」）

「さりとてはつれなやひ
かふる君かたもとのあや
にくになひかぬはてかひ
のとらのひきつな

」（二十九オ）

「　きりつほくみ
きりつほのかうゐのひ
よくれんりのちきりも
さためなきよのならひとて
ゆめのあいたそかなしき

」（二十九ウ、柱丁付は「〇二十五」）

「みしかよのゆめさめて
おもかけをなつむしの身
よりあまるおもひをは
いかて人にかたらん

」（三十オ）

「秋のよはふけゆき月
はにしにかたふく松
かせやなみのをとしか
のこゑそさひしき

」（三十ウ、柱丁付は「〇二十六」）

「みちしるへせし小君の
なかたちにひかれて
ゆくゑまよふかうつせみ
のきぬのかほりそゆ
かしき

」（三十一オ）

「たそやこよひさよふけ
てしばの戸ほそを
たゝくはをのへおろしの
をとつれかくゐなのつくる
こゑ〳〵か」（三十一ウ、柱丁付は「〇二十七」）

「あをやきをかたいとに
よりてなけやうくひ
すうくひすのぬふてう
かさもむめかえたのは
なかさ」（三十二オ）

「　すまくみ
すまといふもうらのな
あかしといふもうらのな
さらしなの月ともにな
かめていさやかへらん」（三十二ウ、柱丁付は「〇二十八」）

「（須磨の浦月の図）」（三十三オ）

「（更級山の図）」（三十三ウ、柱丁付は「〇又廿八」）

「春によせしこゝろのい
つしか秋にうつろふくろ
きあかきのませのうち
によしあるはなのいろ
〳〵」（三十四オ）

「きり〳〵す夜すから
なにをおもひすだくそ
われもおもひにたへか
ねていとゝこゝろのみ
たるゝに」（三十四ウ、柱丁付は「〇二十九」）

「中〳〵に人をはうらむ
ましやうらみしとに
かくにかすならぬうき
身のほとそかなし
き」（三十五オ）

「三五夜中のしん月
くまなきそおもしろ
やちさとのほかの人
まてもさそやなかめ
あかさん」（三十五ウ、柱丁付は「〇三十」）

「しんかうに月ふけて
くるまのをとのきこゆ
るは五てうわたりの
あはら屋のゆふかほをし
るへに」（三十六オ）

「　四きのきよくくみ
春は梅にうくひすつゝ
しやふちに山ふき
さくらかさすみや人は
はなに心をうつせり」（三十六ウ、柱丁付は「〇卅一」）

「夏はうのはなたちは
なあやめはちすなてし
こかせふけはすゝしく
て水にこゝろをう
つせみ
」（三十七オ）

「秋はもみちしかのねち
くさのはなにまつむし
かりなきてゆふくれの
月にこゝろのうつせり
」（三十七ウ、柱丁付は「〇卅二」）

「冬はまつはつしもあ
られみそれこからし
さへしよのあかつき
にこゝろうつせり
あふきのきよくくみ
」（三十八オ）

「をきはさくらのみえか
さねかすめる月をゑに
かきて水にうつせる心
はへもいえなつかしきあ
りさま」（三十八ウ、柱丁付は「〇卅三」）

「たそかれときのまきれに
ほの〳〵みえてさける
は小いゑかちなるのき
のつまにあまりてかゝ
る夕かほ」（三十九オ）

「むさしのもさらし
なもすまやあかしの
おもかけをうつしてこゝ
にすむ月のなかむれは
いつもひろさわ」（三十九ウ、柱丁付は「〇卅四」）

「ゆめにはかりよな〳〵
おもふ人をみちのくの
なこそせきをたれかす
えてうつゝにことも
」（四十オ）

「こひ〳〵てこひしてこひ
しき人をまつち山ま
つらんものをゆきてみん
ゆきていさやはやみむ
」（四十ウ、柱丁付は「〇卅五」）

「あかしかねたる霜よ
のとこもさむけき
あらしのをとはそよ
〳〵さら〳〵とふるや
たまさゝ
」（四十一オ）

「　雲井のきよくくみ
人めしのふのなかなれはお
もひをむねにみちのく
のちかのしほかまなのみに
てへたてゝ身をそこかるゝ
」（四十一ウ、柱丁付は「〇卅六」）

「わするゝやわすらるゝわか
身の上のおもはれてあた
なたつうき人のすゑの
世いかゝあるへき
」（四十二オ）

「たまさかにあふとても
なをぬれまさるたもと
かなあすのわかれをかね
てよりおもふこゝろの
さきたちて
」（四十二ウ、柱丁付は「〇卅七」）

「雨のうちのつれ〳〵む
かしをおもふおりからにあ
はれをとめてくさの戸
をたゝくやまつのさよ
かせ」（四十三オ）

「身はうきふねのかちを
たへよるへもさらにあらい
そのいはうつなみの聲に
つれてちゝにくたくる心
かな」（四十三ウ、柱丁付は「〇卅八」）

「右十三くみのうちにも
「四季の曲（きよく）」「あふきの曲」
「雲井の曲是を三曲と
て大事のならひ也た
やすからぬ事と也」（四十四オ）

天和二年壬戌初秋日

梅むら板行

」（四十四ウ、柱丁付は「〇卅九」、写真②参照）

裏表紙見返　余白

裏表紙

（以上）

A Commentary and reprint of *"Koto no Kumi (tentative name)"* : from my collection.

IIZIMA Kazuhiko

In the summer of 2017, I got a very small book of So Kumiuta. There is a publication note written in the last page of the book as Tenna 2nd year (1682). If this were true, it would be a publication during the Yatsuhashi Kengyo's life, and that he had composed up the 13 suits of Koto songs. And it will add new knowledge to the Japanese Musical history.

It was already suggested by Kenji Hirano that the possibility of Tenna 2nd year's "*Koto no Kumi*". But, the book which can be said just Tenna 2nd edition itself was not found until now.

Immediately, I had compared with Ueno Gakuen Japanese Musical History Institute's Collection books. As a result, it was found that the my book is the oldest print, so the other books are all engraved and each is a separate version. There was "*Koto no Kumi*" of Tenna 2nd edition, indeed.

In this paper, I show the outline of those circumstances and show the whole notes of 13 suits of Koto songs that are printed during the Yatsuhashi Kengyo's life, and are disseminated in general.